

した企業・事業体の委託学生や学費自弁の学生の受入れをはじめ、カリキュラムの自主編成や教材の編纂・選択、他機関との研究・技術開発面での提携・協力、一部の管理者の任命や教授・副教授の資格審査、独自の国際交流活動の展開、国からの予算の請負い使用と自己資金の調達・使用といった権限などを持ち始めている。

とくに財政に関しては、各大学が主管行政部門からの経費のみに依存していた方式が見直され、企業や複数の行政機関との提携による運営経費獲得ルートの多元化が実行されたことや、予算の単年度主義をやめ、節約による剰余経費の次年度繰り越し使用を認めるなど、特筆に値する柔軟かつ革新的措置が講じられた。しかし一方で、自主権拡大により、自己資金調達のために大学本来の業務とは似ても似つかぬホテル経営を行ったり、留学生

の受入れなど国際交流を通じて得られる「利潤」目当てに、指導体制の不備も顧みず国際交流活動に過度に積極的な大学も現れるなど、行き過ぎも見られる。

管理運営改革には別の側面がある。すなわち、管理運営に関しては学長を頂点とするラインとは別に党委員会のラインがあり、後者が前者をむしろ凌駕してきた長年の基本構造を問題にするものである。この体制を不合理として、「党政分離」、つまり党務と大学の管理運営事務とを分け、学長が教育・研究に関わる諸権限を基本的に所掌するのが「校長責任制」であるが、これは部分的な実施にとどまっている上、「天安門事件」以降は党委員会の権限強化の主張が勢いを盛り返してきた。中国の大学改革はまだ試行錯誤の途上にあるといえよう。

各国大学事情と日本人留学生の現状

韓国での留学生生活

留学生センター 多和田 眞一郎

韓国では、総合「大学」のことを「大学校」と言い、「大学」は、日本の「学部」あるいは単科大学に当たるものを言うのが一般的である。これは極めて象徴的なことであると思われる。日本と韓国の大学が（ひいてはそこでの生活が）似てはいるが同じではないことを示す好例とすることができそうである。これを、似て非なるものと考えるか、大同小異と捉えるか、意見のわかれるところであろう。少し飛躍した言い方をすれば、どちらの意見をとるかが留学生活にも反映される可能性は高い。日本から（外国へ）の「留学」と言えば、依然として、欧米へのそれを指すことが普通

のようで、アジア・アフリカなどは、行く人が皆無とは言えないが、ほとんどないと言ってもよい状態にある。韓国も例外ではないようである。（日本にいる「留学生」の7割前後を中国・韓国・台湾で占めていることから一旦瞭然、その一方通行ぶりが際立つが、これは別の問題。）

そうであるから、勢い、彼地の大学のことや留学生生活のことなどに関する情報もあまりないというのが現状ではなかろうか。このような観点から、韓国で留学生生活を送ったとした場合、どのような問題が予想されるかについていささか述べ、資料に供したい。まず、よい勉学条件を得るための基礎ある

いは前提条件としての「衣食住」から始めよう。「衣」についてはさして問題はなかろうから、「食」「住」に的を絞ることとする。

食べ物は、「キムチ」に代表されるように概して辛く、塩からい。にんにくや胡椒もよく使う。

ところで、キムチと言うと日本人は「白菜の朝鮮漬」を考える。最も一般的なキムチは白菜漬であるが、それがすべてではない。そもそも「キムチ」というのは「漬物」のことであって、大根・胡瓜などの野菜類はもちろん、魚・蟹や木の実などのキムチまである。漬物好きの人には堪えられないたえられないだろうが、逆にそうでない人にとっては堪ったものではない。「焼肉」を頼んでも数種のキムチがついてくる。その焼肉もにんにくがたっぷりきいているのが普通で、腹にずしりとくる。

食習慣と言うくらいだから、慣れれば問題はなかろうが、それがなかなか。しかし、外国で暮らすためにはそれが第一義となる。(当然のように、食堂・レストランへ行けば日本食・洋食などもたべられるが、割高につく。あとは自炊という手があるが。)

食器は、日本に比して、金物が多い。また、箸と匙とをセットにして使う。汁物はもちろんのこと、(米の)御飯も匙で食べる。それと関連しているのかどうかは知らないが、器を持ちあげたり、器に口をつけて汁物を食べたりすることは下品なこととされる(実際問題として薬物の入った金物の器などとても持てたものではないが)。日本と反対だと言える。また、一つの大きな器に盛ったものを何人かでいっしょに食べる場合、普通、「菜箸」を使わず、各自自分の箸・匙で取る。違和感を覚えるかもしれない。

次に「住」の問題。

下宿は、それこそ家族の一員のように生活する。普通、一部屋を2人で利用する。毎月下宿代を払う。食事は、普通、朝夕2食付きだが、昼、家にいる時は、家族と同じく、食卓につかせてもらえる。洗濯は自分です

のが原則。下宿探しはどのようにするか。友人を通しての口コミが電柱や壁・塀などの張り紙による。

アパートは、不動産屋を通す。手数料は家賃の10%ぐらいが相場だそうである(日本と大違い!)。家賃の払い方に「チョンセー(伝賃)」と「ウォルセ(月賃)」の2種類ある。

「伝賃」は「一括払い」で、契約時に全額支払い、契約期間が終わると全額返してもらえる。その期間中、家主は、その金を「運用」する。「月賃」は「月払い」であるが、月々払うのではなく、普通10か月単位で契約し、その10か月分を一時に支払う方式。ソウルなど家賃の高いところでは、「伝賃」と「月賃」の折衷方式のようなものも採用されている。

「保証金」として敷金のように一定額を預けるとともに毎月ある金額を払う。保証金は契約終了時に返却される。交渉によっては敷金なしの月払いも可能であろう。いずれにしても、日本同様、韓国でも他の物価に比して、家賃が高い。

衣食住、何にしても「郷に入りては郷に従え」が、外国(異文化社会)で暮らす際の基本原則となるだろうが、こと対人関係においてそれが最も重要となるだろう。しかし、言うは易く、行うは難し。

今度は「つきあい」に関して参考になると思われる事柄を2・3述べることにしよう。

「クエンチャナ」に慣れよう。「クエンチャナ」は「かまわない、気にしない」といった意味になるだろうが、幅が広い。細かいことを気にしないこと。時に「テーゲー(大概)主義、まあまあ主義」ともなり、几帳面な日本人には我慢のならない場合に出くわすこともある。卑近な例をあげよう。机を買ったとする。傷があったり塗りが悪かったりすれば、日本では値引きの対象になるだろうが、そんなことは「クエンチャナ」。考えてみれば、脚が折れていたり表面がざらざらしていたりしたら機能に支障ができるが、そうでなければ机として使うのに問題はない。そんなことかまわんじゃないか、小さいことは気にしない、気

にしない。細かいことを気にしていたら病気になるよ。

「クエンチャナ」とどう折り合いがつかの
かよくわからないが、徹底した議論好きにも
慣れる必要がある。日本人からすると「い
いかげんにしてくれよ」と言いたくなるほど
にあらゆるもの・ことを引用、援用して自説
を展開する。その自己主義の強さにたいいて
日本人は驚き、あきれるにちがいない。世
界的に見れば、あまり自己主張をしない日本
人のほうがむしろ珍しい部類に属するのであ
るから、いつまでも驚き、あきればかりは
いられまい。

議論好き、自己主張の強さと一脈通じると
思うのだが、名を捨てて実を取るのではなく、
実より名を、というところがある。大義名分
を重んずると言いかえてもよかろう。日本人
も大義名分を云々することはあるが、どちら
かと言えば、名より実でいく人が多いから、
相容れない面が多々出てこよう。(例の「謝
罪」問題もここら辺と関連していそうであ
る。)

「水くさい」ことを言うまい。日本人は、
親しき仲にも礼儀ありとか言って、ある程度
の隔たりを置くことをよしとするところがある
が、韓国人は、すべてとは言わないが、親
しさと、隔てをなくすことを同義的に考える
傾向があるから、自分の領域にずかずかと
入りこまれたように感じる場合が多いことにな
ろう。特に下宿などではそうで、擬親子兄
弟姉妹関係ができあがり、プライバシーなど
あったものではないと感じるかもしれない。
しかし、ものは考えようで、異国にあっても、
親兄弟姉妹のように扱ってもらえる集団に属
することができれば、どんなに安心なことか。

「水くさいことを言わない範疇に入ると思う
が、割勘にはなじまない社会である。集団で
飲食に行った場合など、その場のやりとり・
雰囲気などで自然にだれか一人が料金を払う

ようになる。情勢判断のうまくできない外国
人(日本人)がまごまごしている間に料金・
代金は支払われてしまっているということに
なる。だから、その気になれば、いつでもお
ごってもらう立場に身をおくことができるが、
どこか(いつか)適当なところで払う側に回
らないと、そのような人間としてしか評価さ
れなくなるから注意を要する。

韓国も日本と同様六・三・三・四制の学校
制度を取っているが、日本の「小学校」に当
たる「国民学校」6年だけが義務教育で、中
学校以降は自由である。しかし、教育熱が日本
に優るとも劣らぬほど高く、その進学率も
高い。受験「競争」も日本同様、あるいはそれ
以上に苛烈である。だから、時に、これも
日本同様、大学入学をスタートではなく、ゴール
のように考えてしまっているのではないかと
思われる者も出る。(大学の定期)試験前
にコピー屋が繁盛することになる。もちろん
真面目に勉学にいそしんでいる学生も多い。
単位のとり方など大学の内容については日本
と大同小異であるし、それぞれの「～大学
校要覧」の類を見ればわかるから、省略にし
たがう。

前述のように、韓国からの留学生が少な
からずいるから、具体的な問題は彼らに直接聞
いてみるのがよかろう。また、百聞は一見に
しかず、手続き的にも時間的にも経済的にも
たやすく行けるから、下見がてら一週間ほど
でも、まず行ってみることを勧める。

最後に、韓国留学に関する「読み物」を紹
介しておこう。長璋吉著「私の朝鮮語小辞典
ソウル遊学記(増補)」(1975年、北洋社)と『現
代コリア』誌に連載された、筒井真紀子「わ
たしのソウル留学日記」(1990年10月号が最
終回。近く亜紀書房より単行本化される由)
である。